

野田宇太郎
文学散步
第17卷

文一総合出版

著者略歴 明治42年(1909)10月、福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念、久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで、出版編集に携わる。その間、雑誌『文藝』、つづいて『藝林閑歩』の編集責任者となり、以後、著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩の他、全詩集『夜の鯛』、近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』、木下柰太郎研究『きしのあかしゃ』、近代詩史『詩人と詩集』、キリシタン史『少年使節』、紀行随筆『日本の旅路』、戦中記録『灰の季節』、戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年、第1回九州文学賞(詩)受賞、昭和50(1975)年度藝術選奨文部大臣賞受賞、昭和52(1977)年、第3回明治村賞受賞。

野田宇太郎文学散歩 17

関西文学散歩 大阪・堺・淀川両岸篇

昭和52年9月10日 初版第1刷発行

著者 野田宇太郎

発行者 佐藤 弘一

発行所 株式会社文一総合出版 東京都千代田区神田神保町1-32
電話東京(291)8049 振替東京2-42149

©1977. 0395-90117-7354
定価は、函・帯に表示してあります。

印刷・製本 奥村印刷

目
次

2 大阪

みおつくし

大阪駅にて

「大阪の宿」 「夫婦善哉」

お初天神

大阪と食べ物 『曾根崎心中』

曾根崎新地

蜷橋

宗因の墓をたずねて

大鹽平八郎の墓

成正寺 幸田博士の『大鹽平八郎』

洪庵の墓と福翁

天満界限

樽屋橋にて

一五

一六

一三

一六

一三

一四

一七

一四

一五

一六

菅原町

石彫獅子の賦

古風な石屋 獅子と尊徳

「大鹽平八郎」の跡をたどる

鳴外の「大鹽平八郎」 昔と今 反乱の原因

天網島

近松の『心中天網島』 紙治と小春の墓 大長寺の遺書

蕪村の故郷

毛馬と蕪村 毛馬の堤 「春風馬堤曲」

川風の歌

蘭学の薫り

大阪と諭吉 北浜の洪庵 適塾のなか

道修町

薬の町 『春琴抄』

夢は枯野を

「花屋日記」と「枯野抄」 花屋のあと

三

五

六

六

六

六

六

六

一〇一

「よしあし草」

大阪と近代文学 晶子の出発 鐵幹と大阪

一〇七

大阪の宿

大阪の水上瀧太郎 土佐堀の宿

一一五

四ツ橋にて

一二〇

道 頓 堀

一二三

日本橋から

一二六

十軒路地

宇野浩二と大阪 宗右衛門町の裏路地

一二九

法善寺界限

「夫婦善哉」 小路の奥

一三五

「蘆の一ふし」

一四〇

巢林子の墓

法妙寺 近松の業績

一四四

本長寺の泣菫

泣菫と大阪 本長寺 文淵堂

一四八

西鶴墓地にて

普願寺と懷徳堂の墓 西鶴の生涯

浪の入日を

藤十郎の墓

通天閣

ジャンジャン横丁

釜ヶ崎

大阪と武田麟太郎 地図にない釜ヶ崎

恐ろしい町

蓮の葉に書く

住吉大社 鐵幹と晶子と登美子

住之江大橋にて

佃町

安治川にて

『西の旅』 秋聲と大阪

城

一五八

一六一

一六四

一六七

一七〇

一七三

一八〇

一八七

一九〇

一九三

二〇〇

大和川

二〇五

「君死にたまふことなかれ」

二〇八

與謝野晶子の故郷 反戦詩

甲斐町の夢

二一五

駿河屋のあと 晶子の成長

大寺 廃墟

二二一

ひそかな寺

二二五

北旅籠町

二二七

昔の町 河井醉茗

大蘇 鉄

二三三

妙国寺にて

二三七

鷗外の「堺事件」 切腹の日 凄惨な遺跡

墓 穴

二四〇

堺事件の波止場

二四八

サヴェイェルの影

二五一

るいすの墓

二五二

南宗禅寺にて

二五七

堺の茶道 紹鷗・利休・肖柏

茅渚の岸辺

二六三

浜寺海岸と古典 ロマンズ 『晶子曼陀羅』

淀川兩岸

高槻幻想

二五三

「十六歳の日記」 高山右近 キリシタンの町

祈りの川

二六〇

枚方

二六四

橋本

二六七

あしかり

二六六

八幡道

〔蘆刈〕 蘆荻のなか

勇と八幡

宝青庵

円福寺と松花堂

「関西文学散歩」の初稿は大阪にペンを起して昭和三十一年五月二十八日から翌三十二年七月まで大阪読売新聞に連載した。従って本巻は昭和三十一年春から夏にかけての大阪、堺、淀川両岸の記録である。日本はようやく戦後復興の軌道に乗りはじめた頃で、焼け残ったところにはまだなつかしい上方伝統の匂いも漂っていたが、その後の狂乱的経済高度成長の跳梁で伝統無視の都市改造と自然破壊が激しくなり、このあたりは特に関西で最も変化の多い部分となった。しかし記録文学としての「文学散歩」である以上、敢てその後の変化など追わず、むしろ昭和三十一年の大阪、堺、淀川両岸の状態をより厳密に書き遺すことに留意した。

(著者)

関西文学散歩

大阪・堺・淀川両岸篇

大

阪

